
マスカレードに異常なし！？ 第5話 レスチア再び

水鏡樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

マスカーレイドに異常なし！？ 第5話 レスチア再び

【Nコード】

N7702A

【作者名】

水鏡樹

【あらすじ】

マスカーレイドという、小さな街。ウォルガレンの滝という巨大で美しい滝に魅せられた人々が開拓した街だった。そんなマスカーレイドに住む個性的な人たちの物語。第五話は滝を破壊しようとしたレスチア「クマロフ」が再び姿を現す。レスチアの目的は滝の破壊なのか、それとも……？

その1：レスチアの来店

「フッフッフ、わたくしはまだ諦めたわけではないですよ?」

フードを頭からかぶった人物が、あごに手を当てるポーズを決めて含み笑いをもらした。

顔はわからないものの、声はあきらかに男のものだ。

見上げると空には星空が広がりっており、同時にマスカレードの象徴でもあるウォール

ガレンの滝が視界に入ってくる。

男は辺りをキョロキョロと伺い、背負っていたナップサックから複雑な機械のようなも

のを取り出した。それを滝の周りへと設置していき、近場の砂で目立たないようにカモフラージュを施すと、稼動を確認してからその場を離れる。

二つ、三つ、四つと設置を終えて、男は着用していた手袋を外した。大きく息を吐き、

ウォールガレンの滝を離れようと振り返る。と、そこには。

「おいっ！　そこでなにをしている!」

見回りをしていた自警団所属のハリアーだった。男はフードの上から頭をかきつつ、

「ヘッヘッへ、ただの観光でさあ、だんな」

声色を変えて答える。ハリアーはゆっくりと男に近づくと、滝を見あげながら続けた。

「観光ならもつと離れてみるんだ。滝の周りに近づくのは禁止されている」

「それはまた、どうして?」

「滝を破壊しようとした輩がいたせいで、禁止になったんだ。おまえもこんなところをう

ろついていると、そういう破壊魔と間違えられるぞ」

「ありがてえ忠告だ。間違えられないうちにあつしも遠くに離れる
としよう」

男はフードをかぶったままハリアーの横を通り、マスカーレイド
の街の中へと消えてい
く。男を見送ってからハリアーは、あくびをもらしつつ見回りを再
開することにした。さ

きほどまで寝てたせい、まだ完全に目が覚めていない。

ハリアーは滝に背を向け、もと来た道を戻りはじめた。男の配置し
た機械にはまったく
気づかずに……。

普段となにも変わらないオートエーガンでは、いつものように平
和な時間が流れていた。

カウンターには節約のためか、朝食と昼食を一食で済まそうとす
るハンター、定位置で
コーヒーを飲みながら小説を書くクネス。シエラは額に汗を浮かべ
ながら、使い終わった
食器を洗っている。

しばらく静かだった店内の静寂を破ったのは、開くと鳴るように
備え付けられている入
り口の鈴だった。チリーンと乾いた音が店内へと響き渡る。
「こんにちはあ」

店内に入ってきたのは、ユキィボウのお店で働いているエルフの
ラビだった。

「あら、珍しいわね？」

キッチンから出てきた二オが、ラビの姿に目を丸くする。満面の
笑みを浮かべた

まま二オへと頭を下げたラビ。

「今日は久しぶりのお休みですからあ、ここで昼食でもとろうと思
ったんです」

「いい選択肢を選んだわね。やみつきになっちゃうわよ」

クスクスと微笑みながら、二才は台所へと戻っていった。ハンターの横に座ったラビに

シエラが注文を聞きに行く。

「ご注文はどうしますか？」

「あれえ、まだここで働いてたんですかあ？」

「ぐっ！」

久しぶりに会ったラビから無意識の一撃を食らったシエラは、あからさまに動揺していた。握っていたペンがシエラの手から離れ、床をコロコロと転がっていく。

「わ、悪かったわね！ 傭兵の仕事が来ないんだからしょうがないでしょ！」

床に落ちたペンを拾うと、シエラはラビの注文をとって二才へと内容を伝える。

再び洗い場へと戻ったシエラに、ハンターがポツリとつぶやいた。
「まだ傭兵職に復帰するつもりだったのか。てっきり一生ウエイトレスとして生きていく

のかと思ってたんだが……」

「そんなわけないでしょ！」

シエラの反応にハンターはふむと頷くと、肉抜きAランチの野菜をつつきながら話を続けた。

「だったら特殊部隊の入隊試験でも受けに行ったらどうだ？ そろそろ定期試験の時期だぞ」

「特殊部隊の入隊試験？」

「王都直属の部隊さ。シエラは剣術が得意だから、第一特殊部隊を受けるといい。通らな

いかもしれないが、いい線はいくと思うぞ」

シエラは頭をかきながら、口をへの字に曲げた。

「あまりお抱えって、好きじゃないのよね」

「近衛兵と違って、特殊部隊はある程度自由だが……まっ、おれも薦めはしない。そうい

う道もあるって話さ」

コーヒーをすすり、ハンターは大きく息を漏らす。シエラは一度だけ首を傾げてから、

食器洗いを再開していた。

「はあーい、Aランチお待ちせ！」

キッチンから二才がラビの注文を持ってきたのと同時に、再び入り口の扉が開いた。

「いらつしゃいませ！」

完璧な営業スマイルを放っていた二才は、入ってきた人物の顔を見ると同時に顔をしかめて警戒心を露にしていた。

あきらかに様子のおかしい二才に、全員が入ってきた客へと注目する。ちよび髭に背広

姿、つりあがった目にメガネをかけていたその男は、以前、滝を破壊しようとしていたレスチアだった。

「レスチアァクマロフ！」

シエラの叫びに反応して、裏でお酒を飲んでいたアルマが飛び出してきた。滝を破壊し

ようとしたレスチアと同一人物であると確認すると、

「貴様、いったいなにをしに来た！」

とげとげしい口調でレスチアを睨みつける。だが、当の本人はまったく気にしたようす

もなく、ラビの隣へと腰掛けた。

「いえいえ、近くまで来たものですから。このお店の料理はどれも美味しいと評判ですの

で、いかほどのものかと……」

「貴様に出す料理などない！」

「おやおや、嫌われたものです。別に淹を壊しにきたわけでもないのに……」

ギリギリと歯を鳴らして威嚇するアルマを、二才が懸命に押さえつける。

「シェラ、注文をとって」

「いいの？」

「一応、お客様だからね」

「一応とは失礼ですな。ちゃんとお金も持ってきているのですよ？」

胸を張るレスチアに、アルマが舌打ちを放つ。二才は無言のまま、アルマを裏のキッチン

ンへと押し込めた。

「ご注文は？」

シェラは仏頂面でレスチアの前にコップを叩き置いた。わずかだが水がカウンターの

にこぼれる。レスチアはメニューを見ながらあごをなで、一番高いDランチを選んで

いた。「少々お待ちください」

シェラが注文を伝えに裏のキッチンへと消えるのを見送ってから、レスチアが水を飲み

干す。ハンターの存在をラビ越しに発見すると、レスチアは口元をフツと緩めた。

「これはこれは裏切り者のハンターさん。ご機嫌いかがですか？」

「なにを企んでいる……」

「さあ、なんのことやら……」

ギユツとコブシを握り、レスチアを睨みつけるハンター。だが、なにもやっていないレ

スチアを捕まえるなど、当然出来るはずがない。

結局だれ一人として、レスチアを追い出す子など出来なかった。

事件を起こそうとして

いる証拠でもあればまだしも、いまはただの観光客に過ぎないのだ。

「お待たせしました。Dランチです」

「いやいや、どうもありがとうございます」

食事と一緒にトレイに乗せられたフォークを掴み、レスチアは周りの注目を集めながら

悠然と食を進める。

「うーん、とっても美味しいですねえ。こんなに美味しい料理が出る店なら、町が大き

くなればもつとお客も来るでしょうに」

「わたし一人で作ってるんだ。これ以上お客様が増えても裁ききれないわよ」

一通り注文を終わらせた二オが、レスチアの前へと姿を見せた。食べる工程を逐一観察

しながら、時折唇をかんでいる。

その2：フェミリーの持参品

と、そこに騒がしく店内へと飛び込んできたのは、小さなフェアリーの姿だった。

「こんにちはー！今日はこんなもの拾ってきたよ！」

大きな物体を手に持ち、店内を飛び回っているフェミリーの姿に、客の反応は素早いものだった。

「うわっ、フェミリー！」

「なにが起こるかかわらん、逃げる！」

颯爽と逃げ出す客を見送りつつ、二才は大きくため息をついた。店内に残ったのはなに

が起こったかわからないレスチアとラビ、事態になれているハンターとクネスだけだ。

「フェミリー……来るときは事前に連絡をしてって言うてるでしょ？」

「あはは、そうだったね。まあいいじゃないの」

「ぜんっぜん、よくない……」

フェミリーは店内を飛び回るのを止め、二才のすぐ側まで降りてきた。手に持っていたものをカウンターにドンとおき、得意げに胸を張る。

「それよりもこれだよ。面白いものをみつけたんだけど、これにかなあ？」

「ん？」

みんなが一斉にフェミリーの持ってきたものを覗き込む中、レスチアだけがビクツと体を震わせ、座っていた席から立ち上がった。

「どうかした？」

「いえいえ、なんでもございませんのことですよ？」

フェミリーの持参品は赤いデジタル数字がカチカチと音を立てつつ、一つずつ数を減らしていた。中央からいろいろな色の配線が姿を見せては、いずこかへと繋がり姿を消している。

「口調がおかしくなってるけど……本当になんでもないの？」

ニオが目じりを吊り上げながら、レスチアに迫ろうとする。その直後、ハンターの絶叫が店内へと響き渡っていた。

「こりゃ、時限爆弾だぞ！」

「じ、時限爆弾！？！」

ハンター以外の全員が一斉にカウンターから離れると同時に、レスチアがオートエーガンを飛び出そうと床を蹴った。だが。

「どこいくつもり？」

カウンターを飛び越えたシェラが、入り口近くまで進んだレスチアの襟首を掴んでいた。

じたばたと暴れるレスチアを軽々と持ち上げたため、レスチアの足は空回りしている。

「シェラ！ そのまま捕まえといて、絶対に逃がしちゃダメよ！」

いったんはカウンターから離れたニオが、時限爆弾を調査しているハンターの側へと恐る恐る近づいていった。

「ハンターさん。大丈夫？」

ハンターは手に握っていた時限爆弾をそっとカウンターへと戻した。額に広がっていた汗を拭い、ゆっくりと息を漏らす。

「どうやら四桁の数字がパスワードになってるらしい。パスワードで解除するタイプの時限爆弾のようだな。爆発まではまだ時間がありそうだ」

ハンターは懷からパイソン四インチを引き抜き、銃口をレスチアへと向けた。

「パスワードを教える」

「ひつ、な、なんのことやらさっぱりでございますのことよ!」

「三秒以内に教えないと、弾丸がお前の脳漿をぶちまけるぞ!」

「ひつ、ひいいああ!」

先ほども早く足を回転させるも、やはり前に進むことはなかった。

「一!」

「し、知らない!」

「二!」

「や、やめへくれえ!」

「三!」

「わ、わかった! 言う! ○四七八です!」

ガウン!

半泣きで絶叫したレスチアの頬をかすめ、弾丸がオートエーガンの壁へと突き刺さった。

レスチアの全身から、力が一瞬にして抜け去る。

「○四七八だな」

平然とした面持ちでハンターは銃を懷に戻すと、パスワードを打ち込んだ。

「○、四、七、八つと……」

「ドカアアアアン!」

爆音におののいた全員が、一斉に床へと伏せる。だが、時限爆弾はピーという音を最後に、まったく動かなくなってしまうていた。

「な、なんだったの、今の音……」

二才が恐る恐る、伏せていた顔を上げる。店内は平然としたまま、爆発したようすはまったくない。

「あ、あはは、ごめんなさい。こんなに驚くなんて思わなかったからさ」

頭をかきつつ、フェミリーが頬を染めながら店内を飛び回る。どうやら先ほどの爆音は

フェミリーがみんなを驚かそうと叫んだだけらしい。

「あ、あんたねえ！」

「怒らない怒らない。無事だったからできるいたずらだって。あはは」

ニオはフェミリーを捕まえると、頭を指の先でぐりぐりと押さえつけた。

「やって、いい冗談と、悪い冗談の、区別が付かないのは、この頭かぁ！」

「ご、ごめんごめん、悪かったって」

「ちつとも反省してない！」

ニオとフェミリーのやりとりを、平和そうに見守る三人。クネスが違和感に気づいたのはそのときだった。

「シエラ、レスチアは？」

「ん、えっ？ あ、ああ！」

「逃がしたのか！」

先ほどまでシエラの手で吊り上げられていたレスチアの姿は、すでに店内から消えうせていた。

「だ、だって、爆弾が爆発したと思ったから、自分の身を護るのが精一杯で……」

「くそっ！」

ハンターが急速でオートエーガンから飛び出す。

その3：意外な人物と三つの……

だが、意外にもレスチアは店のすぐ前で、意外な人物に捕らえられていた。

「ハンター。あっさりと逃げられてんじゃないわよ」

レスチアの腕をひねりつつ地面にねじ伏せていたのは、黒い上下にポニーテールの赤い

髪、以前ハンターとシエラと共に忘却の遺跡へ行ったレッシュだった。

「くっ、離せ！」

「悔しかったら自力で逃れてみたら？ もっとも……」

抵抗しようとするレスチアにレッシュは、髪をかきあげつつふところからデザートイー

グルを取り出した。

「死ぬ覚悟が出来てるならね」

「ひiiiiiiii！」

頭越しに感じる銃口の感触に、レスチアはあっさりと大人しくなっってしまった。

「どうしてここに？」

「まっ、詳しい話は中で。こいつをふんじばってからね。さっ、立つのよ」

無理やりレスチアを起こし、レッシュはオートエーガンへと入ってきた。店内から発掘したロープでレスチアをぐるぐる巻きにして、席の一つへと座らせる。

レッシュはカウンターへと座り、シエラの出してくれた水を一気に飲み干した。店内に

は先ほどのメンバーのほかに、銃声とフェミリーの偽爆音によって裏から出てきたアルマ

が加わっている。

レッシュに事の成り行きを説明すると、今度はレッシュが自分の現状を説明した。

「ウォルガレンの滝をおびやかすこの男を監視しろっていうのが、今のわたしの任務だっ

たの。んで、ようすをうかがっていたら、突然飛び出してきたもんだから、チョチョッと

捕まえたわけよ」

「さすがは盗賊、身の軽さは……」

「盗賊って呼ぶな」

カウンターに片肘をつき、口元を緩ませつつハンターの額にデザートイーグルが突きつ

けられる。ハンターはひきつった笑いを放ちながら、両手をゆつくりと挙げていった。

「で、この爆弾はこいつが仕掛けたものなのか？」

解除済みの時限爆弾を観察しながら、アルマ。すでに爆弾のカウンタは消えており、衝

撃などを与えない限りは爆発などしないだろう。

「間違いないんじゃない？ こいつが解除パスワード知ってたんでしょ？」

レスチアを指差しながら出したレッシュの意見に、全員同時に頷く。

「んじゃ、フェミリー。この爆弾はどこにあったんだ？ 聞くまでもないが」

「んーとね。ウォルガレンの滝のそばだよ。他にもいくつかあったけど、これが一番軽かつたから」

「やっぱりな……」

「滝を壊すのが目的ってわけですね……」

うーんと唸りつつ、クネスを除いた全員が考え込む。クネスは周

りをきよろきよると見

回した後、恐る恐る右手を上げた。

「あの、ちよつといいですか？」

「なんだクネス」

「今の話……ちゃんと聞いてました？」

「なんのことですかあ？」

だれもわかっていない現状に頭を抑えつつ、クネスはフェミリーにもう一度尋ねる。

「この爆弾は淹の根元にあつたんだよね？」

「うん、他にもいくつかあつたけど、一番軽いからこれをもつてきたの」

「一番軽いからって、時限爆弾を持つてくるなんて……他にもあつた！？」

二才の絶叫で、ようやく全員が我に返った。あたふたと慌てふためくさまを、フェミリー

ーはケラケラと笑って見下ろしている。

「バカバカ！ フェミリー、どうしてそんな大事なことを今まで黙ってたのよ」

「だって、聞かれなかったし……」

頭をかきながらへへへと笑うフェミリーにげんこつを食らわして、二才は縛られている

レスチアへと詰め寄った。

「フェミリーの話、本当なのか！？」

「さあ、なんのことやら……」

そっぽを向いたレスチアの、こめかみとあごへと銃が向けられる。ハンターとレッシュ

が同時に突きつけたものだ。

「わ、わかった。言えはいいんだろ！」

「手間を取らせるな。話は淹に向かいながら聞くぞ！ フェミリーはもしものために自警

団に連絡してくれ！」

「了解だよ！」

フェミリーが窓から飛び去ったのを見送った後、ふんじばったままのレスチアをハンター

ーが引きずりつつ、レッシュが尋問を行う。その背後にニオ、クネス、シエラ、アルマ、

ラビが続いた。

「レッシュって、尋問うまいの？」

ニオが尋ねると、ハンターはにやけながら答えた。

「職業柄な。なんせ……」

「盗賊って呼ぶなよ」

尋問を中断したレッシュが、振り返らずに冷たい口調でぼやく。

ハンターは反射的に両

手を挙げ終えていた。

「それより、爆弾について分かったわよ。残りの爆弾は三つで、それぞれ解除方法が異なるらしい」

「んじゃ、解除方法を全部聞けばいいだろ？」

「それが……ね？ とにかく全ての爆弾を発見しましょう。全てはそれからね」

その4：1つ目

滝のふもつについた二才たちの前に、自警団のハリアーが立ちふさがった。

「ちよつと待て、ここは立ち入り禁止だ。二才たちなら知ってる？」

進行方向をさえぎられたレッシュは、いやいやながら服の右袖をめくった。緑色に輝く

腕輪が、敢然と姿を現す。それをハリアーの目の前へとかかげてみせた。

「王都第四特殊部隊所属、レッシュセルフィツシュた。爆弾が仕掛けられたという疑惑が

あるので、通らせてもらう」

「は、はい！」

初めて見た王都直属を証明する腕輪に、ハリアーは勢いよく敬礼をした。

「あなたはここに残って、滝にだれも近づかないように誘導してくれる？ もうすぐ他の

自警団のメンバーも来るはずだから」

ハリアーは頷き、すぐさま行動に移った。それを背に、二才たちは滝のふもとへと近づいていく。

レスチアの見張りに残ったアルマを残して、残りのメンバーで手分けして爆弾を探す。

なにも知らないウォルガレンの滝は、いまもなお豪快に流れ続けていた。

元々人が入れないのを把握していたのか、隠し場所にはあまり気を使っていなかった。

発見はそうむずかしいものではなく、数分後には三つの機械が二才

たちの目の前に並んでいた。

デジタル数字が減り続けているのは最初の爆弾と同じではあるが、他の部分はまったくといっていいほど異なる形式になっている。

「さあ、説明しなさい」

レッシュの銃口を恐る恐る見やりながら、レスチアが爆弾について説明を始めた。辺りを得もいえぬ緊張感が包んでいく。

「ひ、一つは鍵を使って解除するタイプです……」

「で、鍵はどこだ？」

「そ、それが、どこかで落としてしまったようで……」

アハハハと乾いた笑いを放つレスチア。その笑いを止めたのは、口の中に突っ込まれた

ハンターのパイソン4インチの銃口だった。

「本当だろうな？」

「ほ、ほんろう、へす……」

銃を口から引き抜き、ハンカチで拭いてからホルダーへと戻す。

ハンターはレッシュの

方を向くと、ポンと肩を叩いた。

「解除は頼んだぞ？」

「わたしが？」

「この中で鍵開けについて一番詳しいのは、盗賊であるレッシュだろ？」

「盗賊って呼ぶな」

言いつつもレッシュはハンターの申し出に納得していたのか、すぐさま使い慣れたキー

ピックを腰に着けられた皮製のバッグから取り出す。それから少し離れた場所に鍵で解除す

る爆弾と共に移動し、解除を始めた。

その5：五つのクイズ

「二つ目はクイズで解除するタイプです……」

「クイズですって？」

ニオが聞き返すと、レスチアは口の先を使って機械の一部を指した。

「そ、その赤いスイッチを押すとクイズが始まります。五問正解で解除になります」

「なんなのよ、それ……」

あきれながらも、言われたとおり赤いスイッチを押す。すると備え付けのスピーカーから音楽が流れ始めた。

『バクダンカイジヨクイズニヨウコソ！ サンタククイズガゼンブデゴモン！ イチモン

デモマチガエルト シラナイヨオ』

小さめのディスプレイに、カタカナで読みにくい文章が現れた。

その場にいる誰かの喉が、ゴクリと音をたてる。

『ダイイチモン！ ハンドガンノゲンカイヲコエタ、ライフルノタマヲウツコトガデキル

ケンジュウハ？ イチバン〓三五七マグナム ニバン〓四五四カスール サンバン〓十三

リオート』

「で、答えは？」

ニオがレスチアに聞くと、またもレスチアの口から乾いた笑いが漏れ出していた。

「か、解除するときのことなんて考えてなかったもんで、適当に問題選んだんですね。

アハハハハ……」

直後、二才のげんこつがレスチアの頭部を襲う。うめき声を上げるレスチアを無視し、

二才はため息交じりで問題を見直した。

どうやら拳銃の問題らしいが、二才にはまったく見当が付かなかった。どれも聞いたこ

とのない名前ばかりで、どんなものなのかすら想像もつかない。

「ハンターさんなら、わかる？」

「ん、どれどれ？」

ハンターは問題を黙読で読むと、得意げに軽く鼻をこすってみせた。

「簡単だなこりゃ。答えは……」

「答えは二番よ」

ハンターが答える前に、後ろから現れたレッシユが二才に伝える。二才はディスプレイ

の下に配置された三つの数字のうち、二番のボタンを押した。

ピンポンという音に続いて、スピーカーから歓声が聞こえてくる。

「解除する気がなかった割には、こつてますねえ……」

何気につぶやいたラビは、物珍しそうに爆弾をツンツンと突っついていた。

「ありがとうレッシユ、爆弾のほうは解除できたの？」

「当たり前でしょ？ 敏腕冒、険、者！ をあなどるなかつてね」
冒険者を強調しながら手に持っていた解除済みの爆弾を、二才の前にぶら下げる。先ほ

どまで動いていたデジタル数字は消え、ウンともスンとも言わなくなっていた。

「それじゃあこの調子で、このクイズ爆弾も解除しちゃいましょう！」

「みんなで力をあわせれば、きっと解除できるはずですよ！」

ラビが腕を振り上げ、ピヨピヨと飛び跳ねる。二才は黙って頷くと、今度はみんな

に聞こえるように問題を読み上げた。

「えっと、第二問。エルフの平均寿命は？ 一番〓十歳、二番〓百歳、三番〓五百歳」

「これはわたしがわかりますよぉ！」

素早く手を上げたのは、エルフであるラビだった。

「まあ、ラビが分からなかったらまずいよね」

「答えは三番ですう！ 一番とか二番ってことはないですからぁ！」
「消去法ってやつね……」

ニオが三番のボタンを押すと、ピンポーンという音と、今度はどよめきがスピーカーから聞こえてきた。

「さて、第三問ね。リュウゼツランから造られるお酒は？ 一番〓

テキーラ、二番〓ウオ

ツカ、三番〓ビール……だって。こりゃ、うちののんべえが役に立つわね！」

後ろを振り向くと、レスチアの見張りをしていたアルマが、自分を指差していた。

「ほら、答えて、どれ？」

「自分の親を捕まえてのんべえとは、どういう了見だ。まったく……」

アルマは問題を聞いてなかったのか、もう一度ディスプレイの問題を読んでから答えた。

「これは一番だな。テキーラだよ」

一番のボタンを押す。ピンポーンという音とはやし太鼓の音が、スピーカーから聞こえてくる。

「この調子だな……」

「うん、さあ次の問題は……って、え？」

「どうかしたの？」

後ろにいたシェラが、ニオの後ろから問題を覗きこむ。次の瞬間、

シエラの絶叫が近辺

にこだましていた。

「な、なによこれ！　どういっつもりよ！」

レスチアの首を絞め、ブンブンと前後左右に振るシエラ。その横で二オが忍び笑いを放ちつつ問題を読み上げた。

「シエラフィールⅡファインドイットの好きな男性は？　一番Ⅱマックス、二番Ⅱハンタ

Ⅰ、三番Ⅱクネス」

「ちょ、ちよつと二オ！　その問題はわたしが答える！」

二オを押しつけて、シエラが爆弾の前で陣取る。荒くなつた息を整えようと深呼吸をし

ていると、後ろのほうから二オとクネスの会話が聞こえてきた。

「隠さなくなつて、みんな知ってるわよね？」

「そうだね。たぶんみんな知ってるんじゃないかな？」

「ええええ！　そんなの嘘よ！　でたらめよお！」

涙をまじえた懇願の目で、シエラが振り返る。二オとクネスはお互いの顔を見合わせな

がら含み笑いを漏らしていた。

「じゃあ、みんなで一斉に答えを言ってみようか？」

「あ、それいいね！」

「よくなぁーい！」

絶叫するシエラはみんなの口を塞ごうとしたが、二つしかない手では限界がある。

「せえーのお！」

二オの合図と共に、一斉に口が開かれる。

「いちばーん！」

「いちばんですう！」

「いちばんだろ？」

「いちばんですよね？」

「にいいちばーん！」

「ちよつと！ いま二番つて言おうとして言い直した奴がいたじゃない！ だれなの！？」

「やっぱり知らない人がいたんじゃないの！」

だが、だれもシエラの申し出に反応するものはいなかった。犯人が分からずに涙ぐむシ

エラの肩へ、慰めようと手を回す人影があつた。レッシユである。

「わたしはまったく知らなかったが……まあ応援してるよ」

「そういえばレッシユはマスカーレイドに住んでるわけじゃないから、知ってるわけないよね」

ケラケラと笑い出すニオに合わせて、シエラ以外の全員が声を上げた笑い出した。

「あんたたちい……」

シエラは反論しようとしたが、あまりのショックからかそのままぐったりとうなだれて

しまった。少し離れた場所へと移動し、うずくまってなにやら土いじりをしている。

「さてと、のんきに団欒をしてる場合じゃないぞ。早く答えを押せ」

「つとと、そうだった。じゃあ答えは一番つと！」

ニオが一番のボタンを押すと、いつもの音に、今度は高低さまざまな口笛の音が聞こえてきた。

「さつ、次が最後の問題よ！ なになに……」

ニオは問題を読みながら、目が点になっていた。横からクネスが顔を割り込ませ、代わりに問題を読み上げる。

「えつと、納豆バナナミックスカレーはまずいか？ 一番〓うまい、二番〓まずい

だつて……最後だけ二択みたい」

「なんなのよ、その問題は……」

レッシュが二オの顔をチラリと見る。二オは慌てて両手を振った。

「いや、うちのメニューといえど、さすがにこんなゲテモノは……」

「想像の域ではすごい味っぽいけど、あんがい美味しいかもしれないなあ……」

なかなか結論の出ない討論が続く中、刻一刻と爆弾のカウントは進んでいく。

そこでふと、二オが思いついたように手を打った。

「わたし、今から作ってこようか？」

「いや、そんな時間はないだろ……」

「でも、そうなるとこんな問題、どうやって答えを出せばいいか分からないよ！」

うんうんと、唸るだけになった二オたち。そんな中、ラビだけはなぜか頭に指をあてながら、首を左右に振っていた。

「どうかしたの、ラビ？」

「疑問なんですけどお、これってレスチアさんが作った問題ですよ
ねえ？」

「そりやそうでしょ」

「だったら、レスチアさんに聞けばいいんじゃないんですかあ？」

クイズの答えは忘れて

てもお、美味しい、まずいなんていう主観的な内容まで忘れるとは思えませんしい、

わたしたちとレスチアさんでは味覚も違いますからあ」

全員が一斉に、レスチアの方を振り返った。腰に手を当てて見張っているアルマの横で、

キヨロキヨロと辺りを見回している。

ハンターとレッシュが、おもむろに立ち上がる。次の瞬間、どういう状況が自分の身に

襲い掛かるかを理解しているレスチアは、吐き出すようにボソリと

告げた。

「まずいです……」

「よし、でかしたラビ！」

ニオがラビの頭を撫でると、満面の笑顔と共ににゃはーんといった笑い声がラビの口から漏れる。

まずいのボタンである二番を押すと、吹奏楽器によるファンファーレが流れてきた。

「オメデトウゴザイマス！ コレニテカイジョカンリョウデス！」

その言葉がディスプレイに表示され、共にカウンタの数字が消えた。

その6：3つ目

「よし！ あとは最後の一つね！ 矢でも鉄砲でも持ってこいつてのよ！」

「この場合、持ってこられるのは爆弾以外にないと思いますがあ…」

「…」
ラビのツツコミを無視してニオが振り返ると、レスチアは聞かれる前に答えだした。

「最後の一つは大丈夫です。わたしの言うとおり順番に配線を切つていけば解除できるはずです」

「よし、レッシュ頼んだ……」

ハンターの口が止まる前に、背後から罠の解除にでも使われるであろうニツパーがレッシュから手渡される。

「おれ？」

「わたしも一度危険な目にあってるんだから、今度はハンターの番よ」

「まじですか？」

「まじです」

その場にいるメンバーの全員が、ハンターへと視線を集中させる。ハンターはうつむき

加減で苦笑を漏らしつつ、レッシュからハサミを受け取った。

「わかった。やってみるさ」

「では最初に、緑色の五本の線を全部……」

レスチアの指示通り、ハンターは的確に配線を切断していく。最後に残った赤と青の太

い配線を残したところで、ハンターは額の汗を握った。

「さあ、これで最後だ。どっちの線を切ればいいんだ？」

「……赤だ」

レスチアに言われたとおり、ハンターは赤の配線を切る。だが、カウンタは消えなかった。

た。それどころか誤作動を察知したのか、残り五秒となり〇へと近づいていった。

「おいっ！　どういうことだ！」

「さ、さあ、なんのことやら？」

「くそっ、みんな逃げろ、爆発するぞ！」

ハンターの合図と共に、一斉に爆弾から離れていく。レスチアは一人残り、五、四と秒

数の減っていく爆弾を黙って見つめていた。

「なにやってんだ、死にたいのか！」

「死にたい？　フフ、なんのことでしょうか？」

いままで従順だったレスチアが、嫌らしげな笑いを放つ。みんなが地面へと飛び、顔を

伏せて爆発に備えたところで、ちょうどカウンタが〇を表示した。だが……。

「パパパパパパパパ、パパパパパーン。おはよう、ぼくレスチア。起きる時間だよ？」

起きろおお！　パパパパ……」

辺りに執拗に鳴り響く、わけの分からない音と声。続いてレスチアの、狂ったように響

き渡る哄笑。うるさくわめく機械が爆弾とはかけ離れた、単なる目覚まし時計だと気がつ

くまで　二オたちはまったく動けなかった。

「くっ、きさま！　どういうことだ！」

ハンターがパイソンをレスチアのこめかみへとあてる。だが、いままでのように怯えた

表情はしていない。

「どうもこうも、これはわたしが失くしてしまったただの目覚まし

時計ですよ」

「ふざけるな！」

「ふざけてなどいけませんよ。わたしが一言でもこれを爆弾だと言いましたか？ 勝手に勘

違いしたのは貴方たちでしょう。さあどうしてくれるんです？ 目覚まし時計で拘束など

前代未聞なのではないですか？」

鼻で笑ったレスチアの襟首を、今度はレッシュが掴みあげる。

「いい覚悟だな。他の爆弾もきちんと調べて、引導を渡してやる！」

「フフ、楽しみにしてますよ」

その頃ようやく現れたフェミリーと自警団のメンバーが、レッシュと一緒にレスチアと

解除済みの爆弾もどきを持って事務所へと帰っていった、

「遅かったな、フェミリー」

息を切らしているフェミリーに、ハンターが尋ねる。フェミリーはハンターの頭の上に

止まりながら、

「だっていくら説得しても、信用してくれなかったんだもん！」

腕を組んでプクーツと頬を膨らませる姿に、全員の口からふうーっとため息が漏れた。

「人選ミスだったわね……」

ハンターの肩を叩きながら、二オ。ハンターは無言で頷くと、自警団の後に続いて滝を

後にしていく。

「シエラ。いつまでへそまげてんの！」

「だってだって……このままじゃマスカレード中に……」

「大丈夫だって、みんな口堅いんだから。ほら、もう帰るよ」

シエラを二オとクネスで支え、残りのメンバーも滝のふもとから立ち去っていく。

二日間の調査の結果、レスチアが持ってきた爆弾もどき四つは、全て目覚まし時計であることが判明していた。

その7：完敗

爆弾騒ぎから二日目の夜、星空のようにきらめくウォルガレンの滝の前にかかった橋の

上で、レッシュはボーツと滝を眺めていた。

延々と流れ落ちてくる水流が地面にぶつかり、はじけてはレッシュの下を通り下流へと

流れていく　そんな流れを何度も見やり、時折口から漏れるため息に、我ながら嫌気が差す。

「なんだ、ここにいたのか」

背後から現れたハンターが、レッシュに声をかける。レッシュは振り向きもせず、不機嫌そうに返答した。

「ここ以外に、心を癒せそうな場所があるのかしら？」

「いや、ないな。間違いなくここが最高の場所だ」

レッシュの隣に陣取ったハンターが、顎に手をやりうつむく。しばらく無言のまま時が

過ぎ、先に口を開いたのはハンターだった。

「今考えれば、最初から不自然なことばかりだった。本当に爆弾を仕掛けたのならレスチ

アがオートエーガンに姿を現す必要などない。解除も難しいものはほとんどなく、クイズ

もおれたちの得意分野が多かったしな。レスチアは爆弾もどきを発見して欲しかった。そ

して最後には失敗して爆弾でないことを知って欲しかった」

「全ては王都の命令で動いている、わたしの監視をなくすため……」
ハンターは黙って頷いた。レッシュは両手で頭を抱え、小声でうめくようにぼやいた。

「自警団にみつちりと説教されたよ。人騒がせにもほどがあるってね。この分だと王都にも連絡が行くだろう」

「だれしも失敗はあるさ」

「失敗程度ならね。でも完敗つてのは初めてなんだ」

橋の欄干に頭からもたれかかり、レッシュは大きく息を吐いた。横から見える顔色は、

少し青ざめているようだ。

「まったく、敏腕盗賊のレッシュともあろうものが、尾行を見抜かれるなんて情けない」

「ああ、まったくだ……泣けてくるよ」

いつものセリフが聞こえてこなかったことで、ハンターは想像以上にレッシュが落ち込んでいることによりやく気がついていた。

レッシュはハンターと目を合わせないまま、欄干に顎を乗せて呆然と滝を見つめるだけ

だ。心なしか潤んだ瞳で、かすかに体を震わせている。

「まあ、そのなんだ……」

ハンターは頭をかきながら、独り言のように淡々とつぶやいた。

「今回の事件で良かった点もある。これから先、滝の警備はさらに厳重になっていくだろうし、レスチアだってマスカレードに来るだけで、尾行とまでは

行かなくともチェックされるだろう。なにより、本当の爆弾だったら今頃ウォルガレンの

滝はなくなってたかもしれないんだ。そう考えれば……」

「気休めだな……」

「気休めでも、いま一番レッシュが欲しているものだろう？ 行動を

非難せずに肯定してくれる人は」

フツという短い笑いと共に、レッシュが顔を起こしてハンターを見た。先ほどまで真つ

青だった表情に、わずかだが赤みが差してきている。

「さすがはハンターだ。よく分かつてる」

フーツと細長い息を吐き、レッシュは大きく背伸びをした。

「くよくよしてもしかたがないか……」

「そういうことだ。大事なのはウォルガレンの滝を護りきることに。その点に関して言えば、

今回は成功ってことになる」

「物は言いようだな」

「なに言ってるんだ。言いくるめは盗賊の得意分野だろ？」

「盗賊って呼ぶな」

レッシュの言葉で、二人に笑みが戻ってくる。ハンターはレッシュの頭に手をのせ、髪

の毛をぐしゃぐしゃにかき混ぜた。

「な、なにすんだ!」

あたふたと髪を元に戻そうとするレッシュを笑い飛ばしながら、ハンターはくるりと向きを変えた。

「さっ、行くぞ。オートエーガンで二オがお待ちかねだ」

「二オが？」

「いいから来い」

ずんずんと進んでいくハンターの後を、レッシュは慌てて追いかけていった。

その8：請求書

オートエーガンの中は閉店間際のせいか、閑散としていた。いつもの席で小説を書いているクネスすら、もう姿を消してしまっている。

「ニオ！ レッシュをつれてきたぞ」

「あ、いらっしやい。待ってましたよ！」

後片付けを一時中断して、ニオは二人の下へと軽やかな駆け足で近づいてきた。ポケ

ットから折りたたまれた紙を取り出し、レッシュへと渡す。

「はい、これ請求書」

「請求書？」

「ハンターさんに聞いたら、レッシュに請求してくれって」

レッシュは折りたたまれた紙を広げた。そこにはこう書いてあった。

『請求書

レッシュセルフィッシュ様

十万バツ

但し壁にできた弾痕の修理代として

上記請求いたします。

オートエーガン ニオ

ロス』

「な、なんだこれは！」

レッシュがハンターにすごい見幕で尋ねると、ハンターは半笑いで答えた。

「いやあ、レスチアを脅すために撃った銃弾が、オートエーガンの壁に弾痕を作っちゃってな。その修理代だ」

「それをなんでわたしが払わないといけないわけ！？」

荒れるレッシュとは正反対に、ハンターは落ち着いたようすでレ

ツシュの肩を叩いた。

「ルームクリーニング代、九十五万バツ……」

「ぐっ！」

「忘れたとは言わせないぞ？」

ニッコリと微笑むハンターに、目を輝かせて現金を待つ二オ。レツシュは観念したのか、

財布から十万バツを取り出し二オへと渡した。

「どうもお、はい、これ領収書！」

嬉しそくに領収書を渡すと、二オは足はやに店内の片づけへと戻っていった。

「九十五万バツ請求してるわけじゃないんだから、かわいいもんだろ？」

「ええ、嬉しくって涙が出てくるわ……」

再び潤み始めたレツシュの瞳がなにを意味していたのか。それはだれにもわからなか

った。ただ、ウォルガレンの滝を護ろうとするマスカレードの住民と、レスチアとの抗

争は続いていく。それだけはだれもが感じ取っていた。

その8：請求書（後書き）

マスカーレイドに異常なし！？第五話 レスチア再び いかがだったでしょうか？

今回は滝の崩壊を諦めないレスチアと、マスカーレイドの人々の第二ラウンドを書いてみました。

といっても、レスチアの今回の目的は滝ではなかったわけですが。これで一勝一敗になったわけです。レスチアもまだまだ何かをたくらんでいるでしょう。また、マスカーレイドの面々も、滝を破壊されないために創意工夫をこなしていくと思われます。

マスカーレイドに異常なし！？シリーズはまだ続きますので、今後ともよろしく願います。時間のある方は感想をお聞かせくださると幸いです。

では

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7702a/>

マスカレードに異常なし！？ 第5話 レスチア再び

2010年10月21日13時54分発行